

とは沢山あったが、それは今後に活かしたい。グループごとに様々な分野の人が入るよう企画されていたため、様々な視点からの意見交換がとても面白かった。解らないときにはその場で質問ができ、司会の手際良さもあって、想像していたよりも楽しい雰囲気でも議論することができた。グループディスカッション後の懇親会は話すことに慣れたおかげでリラックスして臨めた。懇親会会場は溢れんばかりの人で、小さなグループがどんどんできて話に花が咲いており、私も遅れをとるまいと話しの輪に入りこんだ。

今回、本研究会に参加した目的のひとつに女性研究者と親交を深めたいという気持ちがあった。私の周りには博士課程以上の女性が少なく、同学年に

至ってはほぼ皆無である。そのため、このような研究会に積極的に参加することで将来のロールモデルとなる人と出会えるか、はたまた切磋琢磨できる友人ができるかもしれないと期待していたからだ。今回の女性参加者の数は12名と多い方ではないが、色々な立場の女性研究者と話しができてとても有益だった。研究会後も近況を話せる友人ができ、さらに共同研究を行う相手を見つけられて、私の中でこの交流会は大変満足の行くものであった。これからも女性の参加者が増えることを期待している。次回が待ち遠しいものだが、今回は単なる参加者ではなく、この会の運営にも積極的に関わっていきたくて考えている。最後に、講演下さった先生方、企画、運営して下さい世話人の方々にはこの場を借りてお礼を申し上げたい。大変ありがとうございました。



科学の時間：生物リズム若手研究者の集い2011参加記

鵜飼和也

大阪府立大学 生命環境科学研究科 博士前期課程1年

僕自身が“科学”という言葉を実際の意味で理解しているかということ、そんなことはないと思います。しかし、この夏の2日間は“科学”を感じることができた時間でした。実際に参加してみて、たくさんの方の話を勉強させていただきましたが、個々の講演内容や研究に関する知見にはあまり触れずに、その中で自分の感じたことについて書いてみようと思います。

参加する前は、多くの分野の研究者の方と交流できることを思うと、楽しみな気持ちと、自分の研究や意見がどのように写るのかという不安の気持ちがありました。やはり新人の自分にとってこのような積極的な場に参加できることはとても楽しみでした。

まず感じたことは、時間生物学というこの不思議な分野には、さまざまな研究者があつまっているのだということです。

この2日間で哺乳類、鳥類、昆虫、植物、粘性細菌などの多種にわたる生物種に携わる研究者の方とお話することができました。さらには同じ種においても時計遺伝子に迫る分子生物学的研究や、光周

性、睡眠覚醒リズムのような生理現象の動作原理に迫る研究など、一つ一つに特色のある研究が多いことを改めて実感しました。また、僕は植物の体内時計システムについて、実験データに基づいて位相振動子モデルを用いた理論的な研究を行っているのですが、学科や研究室内においては結合振動子系の研究をしている友人がおらず、理論的な研究について語り合う場がなかなかありません。今回の会で理論研究者の方ともお話させていただくことができ、結合振動子系の理論研究について、ネットワーク構造によるエイジング分岐への影響など、興味深い切り口で研究を展開していることを知ることができました。また、理論研究の問題設定や実際の進め方、研究室の様子など、生の話ができたことが非常にうれしかったです。

先生方の講演やグループディスカッション、夜遅くまで行われた懇親会、さらには移動時間やちょっとした空き時間などに、頭がパンクしそうなほど多様な研究について話げできたことは、時間生物の多様性を感じられる素晴らしい体験でした。理論的な研究から実験的な研究、さらにその基礎から応用ま

でという、幅広い研究者が集まる場の中にいると、専門的な授業を受け、同じ勉強をした仲間といるときよりも、自分が科学という世界に関わっているのだという実感を得ることができました。

もうひとつ、印象的だったことは、研究者生活についての話を聞くことができ、互いに語り合えたことです。

講演では、本間先生の自宅入手の経緯や安尾先生の学生時代の生活など、学会等では聞けないような、とてもおもしろいお話を聞かせていただき、楽しませていただきました。また、酒を片手に語りあえる夜の時間では、先輩にあたる方々から研究生生活や研究について思うことを語っていただき、熱い意見交換をさせていただいて、研究者の生の姿を垣間見ることができました。同期やそれに近い方々と宿泊部屋などで将来のことや研究について語り合えたことも、自分ももっとがんばろう、という気にさせてくれる、とても刺激になる時間でした。

このような話は学会などではなかなか十分に語り合えないのではないかと思います。また、自分の研究室内では、仲間同士の研究生生活は似たようなものになってしまい、それが当たり前になってしまいます。時折、他の方からがんばっているエピソードを聞くと、自分はまだまだだなあと思うと同時に、もっとがんばれるという気力をもらうことができます。この二日間の研究者の集いは自分の研究者としての感性を広げ、心機一転する気力を生み出す絶好の機会だと思います。皆それぞれに悩みもあるけれど、研究に日々取り組んでいること、科学を楽しんでいることを感じる事ができ、気持ちを新たに自分の研究に向かうことができました。

一方で、これだけ時間生物の話に囲まれていると、頭の中がぐるぐると渦を巻いているような不思議な感覚になり、ふとしたときに時間についてあれこれと考えていた（妄想していたとも言えますが）ことも思い出になりました。

僕は趣味で音楽演奏などをするのですが、音楽が人に感動を与えることについて考えると、時間の流れというものを感ずることがあります。ひとつひとつの音だけみれば、決まった波長の音波でしかなく、それだけを聞いても感動するというほどのものはないように思います。ところがそのひとつひとつの音が作曲者や演奏者の創造力によって、リズムを持って、流れていくことでひとつの曲になり、それが人の心に響いて感動を起こします。このような音とともに流れる時間がなければどうして音楽に感動することができるのでしょうか。トイレ中や帰りの電車の中で、そんなことに想いをめぐらしていたりしました。

私たちの日常生活においても時間というものは非常に大切な意味を持っており、それはすなわち、生命と非常に近いものなのかなと思います。生物が時間をどのように計り、感じて、生きているかという時間生物学におけるテーマはとても知的でかつ、生き活きとした魅力を持つものであるということを実感することができました。

二日間を終えてみれば、さまざまな新しい知識に出会えたこと、自分の研究について意見や感想をもらったこと、それだけでもすばらしいのに、さらに、時間の科学というものについて考え、あれこれと想像をめぐらすことができたこの時間は、自分の予想以上に、とても贅沢で、充実した時間でした。研究者の交流というのは単なる知識や情報の交換だけではなく、意見のぶつかり合いの中で自分の科学に対する意識や感性を見つめなおすことができる、とても有意義な時間であるということを経験でき、参加して本当によかったと思っています。

最後にこのようなすばらしい会を開いてくださった世話人の方々へ、感謝の意を表して、この参加記を締めくくりたいと思います。ありがとうございました。